

【書評】

Mark Bassin, Sergey Glebov and Marlene Laruelle(ed.)

*Between Europe & Asia*

*The Origins, Theories, and Legacies of Russian Eurasianism*

(Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 2015, pp.267)

木村崇

(京都大学名誉教授)

Kimura, Takashi

(Professor Emeritus, Kyoto University)

書評対象は、ユーラシア主義への新たな接近を試みた 10 編の論文からなる論集である。編者に名を連ねる三人は、いずれも名の通ったユーラシア主義論者で、各自論文執筆も担当している。本文は章立ての論文編だがその前に、本書が採りあげるいつかの問題群とその分担執筆の輪郭を解説した連名の序論があり、またうしろには代表一人による後書きと論文著者たちの研究経歴などが配置され、それらが読者へのよい手引きとなっている。出身や勤務地が北米・欧州・日本に分かれながらも、現在、ユーラシア主義研究の最前線にいる 10 名が、綿密に事前の打ち合わせを重ねた結果編まれた論集であることは一目瞭然である。

ユーラシア主義は、超広域の学際領域に属する研究対象なので、既存の学問分野では、個別対応が不可能である。歴史学、哲学・哲学史、思想・思想史、民族学・民族誌学、地理学、地政学、比較文明論、比較文化論にくわえて、言語学、人類学、人口学、考古学、分子生物学などまで総動員したとしても、おそらくカバーしきれないであろう。

ロシアは、多様なエスニック的部分集合からなる全体集合である。「純粋なロシア人」など一人もいないだろう。誰でも自分という存在が幾重にも繰り返されたエスニック的「混交」の結果であることをよく知っている。つまり、ロシア人は、一個人でさえ、多様なエスニック的部分集合からなる全体集合なのである。かつてソ連の国内パスポートには民族名を書く欄があったが、それはそう自己認識したというしるし以上のものではない。自己認識された「民族性」と、DNA で識別しうる個体の「エスニック性」との関係は完全に恣意的である。極端に言えば「ロシア人」になるにはロシア人の DNA などなくてもよい。スターリンがよい例だ。

ロシア姓の語源がエスニック的多様性にいろどられていることは、今述べたことの証となるであろう。ロシア語の語彙には、フィン・ウゴル系やチュルク系、モンゴル系をはじめ、彼らの先祖が境界を接していた生活空間で深い交流のあった様々な部族や種族の生活を反映した痕跡がいくつも見つかる。いわゆるヨーロッパロシアにさえ、各地に非ロシア系諸族が生活した

痕跡は残っている。文献に目を転ずると、中世ロシアの年代記には異教徒、即ち非東スラブ系集団との「いさかい」に関する記述の比重がたしかに高い。しかしそれは今日のニュース報道と同じで、平穏無事な状況はネタにならなかったからであろう。実際には融和的とまではいえないにしても、依存しあう関係が普段の景色だったはずである。トルベツコイやサヴィツキーらはそこに着目したようで、大いに同感するところがあった。

とはいえ、この種の「事実」の発掘努力は残念ながら徒労に終わる定めにある。多民族による特定の地理空間共有の史実も、その言語的な裏付けも、宗教情報も、いくら積み上げてみたところで終局的には無駄である。母語が何でどんな宗教を信じるかなどということは、当該の人間や人間集団の民族的あるいは文化的自己認識を決定する因子ではないのだ。では一人一人のロシア人は何をもって自分を「ロシア人」だと見なしているのか。同義反復的になるが、それは「ロシア的なもの」に理屈ぬきの親和性を覚えるという一点に帰着する。したがって問題を解く鍵は、「ロシア的なもの」がいったいどのように形成され、どんな作用と反作用の結果自己認識に決定的な力を及ぼしたかにあると思われる。

このように理解していたので本書を読むまでは、ユーラシア主義の主唱者たちの言説にどこか腑に落ちないものを感じていた。たとえばトルベツコイは、東スラブ諸族とアジア系諸族との生活空間の共有関係を述べる際に、言語の種別を通して民族的差異を識別し、それらの言語的特徴のなかに共通項を見いだそうとしているように思われた。ヨーロッパについても、「ロマンス的・ゲルマン的」（これは言語の系統分類そのものであるが、なぜかアングロ・サクソンが抜けている）とするだけで、ヨーロッパを「ヨーロッパたらしめている」ものが何かについては言及を避けているように見えた。繰り返すが、ある人にとっての第一言語は、民族的自己認識を促す契機になることはあっても、かならずしもそれによって決定されるわけではない。だからトルベツコイの、言語に依存した立論には警戒心が先に立った。

本書を読んで気付かされたのは、思想も専門も出自もそれぞれ違っていたユーラシア主義者たちを結びつけたのは、彼らがやむなく暮らさざるをえなくなったヨーロッパへの全般的な反感や違和感であったらしいということである。とりわけ海外植民地の収奪から得た富によるヨーロッパの「繁栄」や「先進性」と、それを野放図に肯定する「価値観」に怒りを覚えていたことが明らかになった。本書ではユーラシア主義者たちを *émigré*, *exile* あるいは *refugee* と、各人各所でいろいろに呼んでいるが、本人たちの心情としては、今日でも大量に生まれている *refugee* に近かったのではないだろうか。トルベツコイの代表作の一つである *«Исход к Востоку»* という題名に彼が込めた、西側にきっぱり背を向けてまっすぐ東を目指そうとする気持ちがよく分かった。

序文によれば本書は、「ユーラシア主義についての異なる学問分野からの、そして異なる主題的展望からの研究」にねらいをつけているという (p.1)。所収の論文がそれぞれの持ち場に立ってこの任にあたっているというのであろう。ユーラシア主義は「超広域の学際領域に属する研究対象」である以上、たしかにそうする以外に手段はない。しかしそれにとどまることなく、共同作業がともに目指す一つのゴールがあるという。それはユーラシア主義者たちの「語り」がなされた「多様な文脈を再構築する」ことだ (p.2)。たしかに、ユーラシア主義はヨーロッパの地に孤立して開花したあだ花ではなかったにちがいない。日本から唯一人参加している浜由樹子は5年前『ユーラシア主義とは何か』(成文社、2010)で、「批判的に検討されるよりも、要約されることの方が多い」当時の研究状況を憂えて、「1920年代のユーラシア主義を再検討

することも、本格的な研究成果を踏まえた上でより広い文脈の中でこれを考察することも、未だに残された課題のままなのである」(同書、p.52、傍点—評者)と書いていた。今般ようやくその「課題」に手をつけることができたのだと理解した。

書評に与えられたスペースは残り少ないので、以下、各論文の中で評者の目に止まった点だけを記す。

本文1章はオリガ・マイヨロワ論文で、思想的関連性を探るためにゲルツェンのアジア観を論じている。ヨーロッパで作られたステレオタイプな世界像は、教育を通して18-19世紀のロシアの上流階級の子弟にすり込まれた。現実を見る目が出来てくると、彼らの多くは自身の自己同一の不確定性に悩むことになる。ゲルツェンも亡命中イギリスやフランスの現実を見てひどく失望し、「アジア性」を残すロシアの「農民共同体」に社会主義革命実の担保を見いだしたという。この見解は執筆者自身が認めるとおり斯界のよく知るところで(p.17)、日本でもたとえば、長縄光男の『評伝ゲルツェン』(成文社、2012、pp.301-306)に詳論されている。執筆者はゲルツェンが、英仏も中国・ペルシアと同じ沈滞(これも当時流布していたステレオタイプだが)への道を歩むと見て、東・西関係が入れ替わりうることに気付いた点を評価している。しかし後進ロシアの「優位性」を主張したのだとすれば、遅れた資本主義国のほうが社会主義革命には近道だと説いたボリシェヴィキの「強がり」と同類だったのではないだろうか。執筆者は、将来ロシア人は帝国のアジア系諸民族と連携してネイションとしての真のアイデンティティを確立する、ゲルツェンはそこに歴史的使命見ていると指摘する(p.25)。ユーラシア主義の創始者たちは先人ゲルツェンと、19世紀末のレオンチエフを思想的媒介者として半世紀以上のちに、「永久亡命者」という同じ運命をたどったが、彼らが奏でた「同工異曲」の「異」の諸側面が最後に、走り書の感がするものの、様々に論じられる(p.26)。

2章はヴェラ・トルツ論文で、帝政末期のリベラル派とユーラシア主義者の関係を扱っており、1917年をはさんで続いているものと変わったものに注目する。世紀末から20世紀初頭にかけて汎ヨーロッパ的規模(周縁としてのロシアも含め)で生じたオリエンタルなものへの見方の変貌、ヨーロッパ中心主義への批判の文脈の中にユーラシア主義を位置づけようということらしい。当時ロシアの東洋学、ビザンチン学も独自の発展を見せる。サヴィツキーやヴェルナツキーらはこの分野の碩学コンダコフの直接の影響を受けたとされる。ペテルブルグ大東洋学部長ローゼン、イスラム・中央アジア学のバリトルド、コーカサスの言語学・考古学のニコライ・マルらには、ユーラシア主義者との比較で5つの共通する分野が確認できるという(p.31)。残りの部分に触れる紙幅はないので、小見出しを提示するにとどめる。「ユーラシア帝国の文化と一体性」、「ヨーロッパ中心主義批判」、「ロシア史に支配的な語り口を修正するには」、「ヨーロッパ文化と植民地主義の関係」、「帝国とネイションとの矛盾を解決するには」である。論の展開の幅広さと、論点の深め方には感心した。評者は収録全論文中の逸品と見た。

3章はセルゲイ・グレボフの論文で、「トルベツコイの『ヨーロッパと人類』とユーラシア主義の反進化主義」と題されている。「未発見原資料一点」という副題が付く。まず学者トルベツコイがどんな知的環境で誕生したかが語られ、ついで『ヨーロッパと人類』の執筆経緯とそのエッセンスが吟味される。ダーウインの生物進化論の影響で社会ダーヴィニズムが出現するが、ロシアにも賛否両論が現れた。賛成者はロシア帝国が「文明化された中核部分」と「後背のエスニック的周縁」に分裂するのが必然と考えた。この考えに対する代表的反対者はダニレフス

キーであった。地理学、歴史学、湖沼学の大家であったレフ・ベルグは 1926 年に「モノゲネシスあるいは一定不変性に基づく進化」という概念を提唱する。トルベツコイはスフチンスキーに当てた手紙で、ダニレフスキーの同調者であることを自認しているベルグの本が面白かったと書いているという。副題はこれを指したものであろう。

4 章はマルレヌ・ラリュエルの論文で、ユーラシア主義の地理思想としての「テリトリー」を論じている。最初の節で著者はサヴィツキーのおなじみの「四つの旗状地帯論」を解説してユーラシア主義の考え方を解剖してみせる。彼はモンゴルとチベット、ウイグルはユーラシアに含まれるが、キルギス、テンシャン、タジクパ・ミールは含めないという。ザカフカーズも含めないのはステップではない山岳地帯だからか。これらの地はサヴィツキーの定義ではアジアということになる。アジアの定義は自然地理学ではなく、文化・文明論的な尺度で切り取られ、3 つに下位分類される。この点ではハルビン在住作家フセヴォロド・イヴァノフたちには中国をどう位置づけるかで異論があったらしい。全部を紹介するわけには行かないので、以下は小見出し、「諸科学と地理知学(Geosophy)の収束」、「国家の表現及び実現の場としてのテリトリー」を書き出すにとどめる。これら 2 節からは、従来の研究を超え、大きな文脈でサヴィツキーを捉え直そうと試みていることがよく分かる。

5 章はステファン・ヴィーダーケアの論文で、ユーラシア主義はカール・ポパーがその無効性を思弁して見せた「歴史主義」であることを指摘したものである。ポパーのターゲットはヘーゲルの歴史哲学の流れを引くマルクス・エンゲルスの史的唯物論だと解していたので、意外であった。ポパーを読み返してみると、シュペングラーやトインビーまで射程に入っている。未来のユーラシア国家の政体を特徴付けるキーワード「理念統治主義 (идеократия)」が俎上にのぼる。ユーラシア主義者たちには西欧の民主主義や議会制度に根底的な不信があった。それに替わる政体なのだろうが、それが「歴史主義」的だという。経済は「歴史進歩の法則性」にのっとった計画経済を念頭おいていたらしい。ポパーに言わせればまぎれもない歴史主義であろう。反植民地主義はポリシェヴイズムにもナチズムにもその使命は果たしえず、旗頭となりうるのはユーラシア主義だと考えた。まさに「メシア信仰」で、こういう発想はたしかに歴史主義だ。でも「それが何か？」と反発したくなる。現在の人類はすべてアフリカに現れたカップルを共通の祖先にもつことが証明されている。しかしその後どんな道をたどって今日に至ったかは全くといってよいほど解明されていない。そういう壮大な時空のひろがり人類の行く末を見なければならぬのに、人類が発揮した豊かなイマジネーションを「歴史主義」の刀でばっさり切り落してよいものだろうか。

6 章はマルティン・バイスヴェンガーの論文で、「経済学の形而上学」と題されている。内容はサヴィツキー論である。彼はこれまでその地理学ばかりが注目されてきたが、経済地理、地理知学あるいは地政学にも優れた才能を発揮したとしている。小見出しは「若きサヴィツキーとロシアの経済現代化」、「ユーラシアの『清められた経済』」、「宗教、経済、そしてサヴィツキーのユーラシア主義」、「ユーラシア主義者たちのなかにおけるサヴィツキー」となっている。興味を抱いたのは彼が 1921 年、あるべき経済への指導書として新約聖書に立ち返ったという指摘である。ヴェーバーの『プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神』を思い出した。農業の「篤農者(master)」がいとなむ理想的農業のありかたを考察して「篤農主導主義(masterocracy)」を提唱、ついで工業に論を進めるはずだったが、それは実現しなかったという。ユーラシア主義者たちのあいだでも「篤農者」は理解されなかったらしい。レーニンも取

り組んだ金融寡頭制の問題をぬきに経済のありかたは語れなかったはずだが、どうやらサヴィツキーの経済学的視野はそこまでは及ばなかったようだ。

7章はイゴル・トルバコフの論文で、ゲオルギー（ジョージ）・ヴェルナツキーの知的探求の過程を跡づけたものである。歴史学者としての一貫した成長のうらにユーラシア主義へ接近した真の理由があるという。祖父の代からの学者一家であったが、長じてのち父親と深い知的交流ができ、ウクライナ人としての「気づき」を契機に、自分の二重アイデンティティをとおしてヴェルナツキー史観が形成されてゆく。アイデンティティが定まるのはアテネ、プラハを経てパリに落ち着いたときだという。小見出し「ユーラシア主義の枠組み」にはヤコブソン、トルベツコイ、サヴィツキーらとで取り組んだ具体的な思想的、学問的活動が語られる。彼の関心の中心を占めるものはナショナリズムであった。ロシア帝国の民族政策と英仏の対外植民地問題、ウィルキンソンの自由主義的な「自決権」論、ボリシェヴィキ・プロジェクトなどが共同の議論の中心にあった。またユーラシアのナショナリズムの有り様について「主人的種族」、「離脱権」などの難問が持ち上がっていた。最終節「ジョージ・ヴェルナツキーとロシア・ユーラシア史」では、ヴェルナツキーがロシア史をどのように「再概念化」をはかったかが語られる。ユーラシアの中にウクライナをどう位置づけるかというジレンマがあったが、彼は理論的整合性ある合意点を見いだした。米国で出版された最初の著書は『ロシア史』であった。またユーラシア主義的著書の初出としては『ロシア史概説』があげられ、このあと論文ではこれらの労作をめぐる様々な評価、意見が披瀝される。

8章はハーシャ・ラム論文で、ロマン・ヤコブソンとフレイブニコフの未来派的ユーラシア主義を扱っている。文学・言語学分野の問題に光をあてた論集中唯一の論考である。20世紀初頭、世界とシンクロする形でモダニズムの様々の潮流がロシアに台頭したが、ユーラシア主義運動のなかにもこれと連動して理論的・実践的試みが見られた。いわゆるプラハ学派の構造主義言語学もその一環であった。その重要なアクターの一人がロマン・ヤコブソンである。また日露戦争がきっかけで未来派詩人フレイブニコフの創作活動にアジアイメージが生まれ、構造主義言語学とも深く関係づけられる独特の詩的世界が広がっていった。執筆者はこの二人間に展開された思想的、理論的、創作的相互影響関係を跡づけている。初耳の情報が盛り込まれていてたいへん刺激された。

9章は浜由樹子論文で、ユーラシア主義の波が早くから日本にも及び、それが「大アジア主義」に繋がっていった過程を明らかにしている。内容的には浜の前掲書中最終第4章第5項を受け、さらに発展・深化させたものである。執筆者はまず、ユーラシア主義と日本で生まれた「大アジア主義」とがなぜ共通性を持つようになったかを、戦間期の国際状況と、急速に進んだ日本の近代化状況を比較分析してその理由の解明を試みている。次に中根鍊二と嶋野三郎がユーラシア主義文献を翻訳した動機を推定分析する。とりわけ後者の我田引水的に歪められた翻訳態度から、日本の右翼思想・団体の理論武装に資することになった様々な論点と論理を取り上げている。おしまいに、日本での受容に対するユーラシア主義者、なかでも作家イワノフなどのハルビン、極東アジアに亡命した者たちからの反応にもふれている。「大アジア主義」は日本の閉鎖空間に生じた一次的な特異現象かと思っていた。このテーマは今後研究の広がりを見せると思う。

10章はマーク・バッシンの論文で、「クリコヴォの戦い」の真相をめぐるロシア史研究で繰り上げられる「語り」、つまり「史実の神話化」、の差異に着目して、レフ・グミリョフとロシ

ア民族主義者たち、そしてソ連崩壊直後に現れたネオ・ユーラシア主義者たちの言説を検証し、その本質をあぶりだそうという大胆な試みを展開している。とりわけグミリョフを取り巻くロシアの学界の態度を詳しく知ることができて、評者には非常に参考になった。また5年前、アジア版の中東欧ロシア研究国際会議がソウルであり、評者はペテルブルグ大学で哲学を担当するある教授の「ネオ・ユーラシア主義」に関する、学術的レトリックをちりばめた報告の対論者を引き受けたことがあった。その時覚えた言い様のない不快感の原因を、この論文によって知ることができたのは大変よかった。